

Title	増田四郎著 ヨーロッパ社会の誕生
Sub Title	"Birth of the European society" by S. Masuda
Author	宇尾野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.4 (1949. 4) ,p.276(64)- 279(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19490401-0064
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490401-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

増田四郎著

『ヨーロッパ社會の誕生』

宇尾野 久

われわれが、さきに教授の『獨逸中世史の研究』に接してからすでに五ヶ年を積みしている。この短期間ではあるがしかしわれわれにまさに隔世の感をいだかしめるほどの變動が、わが國では怒濤のように繼起している。

『獨逸中世史の研究』でわれわれは教授のザツハリッヒなしかもダイナミックな力強い諸研究成果に接したのであるが、當時のヨーロッパ史學界にあいついであらわれた諸成果のゆえにわれわれにはむしろめまぐるしいまでの感じをあなえた。しかしこの間、堅實に、これらの諸成果に拉し去られることなく、けんさんを積まれたのはやはり良き師、恵まれた學問的環境と教授自身の努力の結晶に外あるまい。

本書は一貫せるテーマのもとで書かれなかつたとはいへ、教授の研究の基盤からさらにし、として精進された諸成果の合しておのづからオリエンティールングをとるに至つた奔流にはかならない。史學における困難は、史料の正しい位置と意義の把握のなかにあつてしかも史料に埋没することなく充分にこれを驅使することにもある。ザツハリッヒなしかもヴィヴィッドな研究は、まさにかゝる内面的な探究と全面的な研究の統一の上

に立つて始めて可能となる。したがつて、本書の流麗な筆致に愧せられて、その骨の努力を忘れてはならない。

本書第一編は、ヨーロッパ社會の研究にあつて最も困難な時代の一つに屬し、著者の苦心のあとが深くきざまれている。教會史や幾多の年代記又はモノグラフ等を着實に、現在われわれに可能なかぎりの最大限をもつて検討されたのち、この不明な時代に光を與えようとする著者の苦心は察するに餘りあるものがある。

五・六・七・八世紀における社會經濟的史料の不明さは、一見カツシオドル・グレゴール・トロネンシス・アインハルデイ、または、フレデガールの年代記等々のヴィヴィッドな記述にもかゝらず、また不完全であるとは云へ、諸部族法典令、または諸書式集、書簡集等々が豊富に存在するとは云へ、研究者をして困惑せしめるのである。ピレンヌやドーブシュの敘述にとゞまることなく、厳格な自身の研究の基盤の上に立つてこれらの諸成果を充分に攝取し、しかもその諸矛盾および不明な點をさらに展開し、自己の見解を開拓することは、決して單なる小才子や俗物のよくなしうるところではなく、謙虚な研究態度と全身をもつてする獻身的な努力がなければ不可能である。

フランス史學は、加うるに史的天分をもつてしその史的直觀とレアリズムの調和をあげるものであるが、天馬空をゆく如き獨逸イデオギトとランケ・ワイツ・ドーブシュ等のザツハリッヒカイトとの統一たるドイツ史學は、對照的な對立をなすとは云

へ、等しく科學的歴史研究の作法は、嚴守されている。われわれは、まじめな科學者の進歩的な創意と成果に深く注目せねばならない。

本書の内容を詳細に紹介し、検討するには、紹介者は一冊の著書が必要とするほどであるが、今は、それを斷念せねばならない。すぐれた外國の勞作の紹介には、これを正確に投映することばの苦心以上に、その書を自らの手で書くだけの力量がなければ、淺薄なものとなるのであるが、本書の書評に當つて紹介者は、自己の非力を深く反省せねばならなかつた。

フランク、とくにメロヴィングの王朝の歴史をたどるものはその殘忍無類な、モンスタラスな陰謀、逆殺の血潮のしたる野蠻さに眼をそむけるのであるが、この時代をとりあげる以上、これを直視する勇氣をもたねばならない。フランスの史學者達は、ガロ・ローマの文明を壊滅せんとした(しかし實質的にはガロ・ローマを完全に征服し得なかつた)バルバレンにまさか好意を示しておらず、さらに黒田の小悪黨などとは異つたモンスタラスな政治的蠻僧の數々の業績をも卒直にのべている。ドーブシュが「タキトスのように」ゲルマシの教訓をひけらかし乍らフランク王國を美化し、カロリングのルネサンスを誇張する態度は、フランス人には(またはその媒介者たるイタリー人にさえ)毛すじ一本ほどもみられない。だが Pepin le Bref の usurpation に對する Resistance にもかゝらず Charlemagne (Carolus magnus) は、その血管にガロ・ローマ

の血をとめていく點で、「また被征服地の住民(とくにコンバルド人)の財産や慣習を尊重した點で」Austria, Neustria, Burgund の Duces や Regis minor 又は Regis magnus のようなメロヴィングのメルバレンの Regis (Konig) とは異つた態度でむかえられている。フランクの人民に基盤のおかれるヘロサイトや Christentum がその支柱となつていくが、ローマの財産たる Villa, Fundus, pedum や他部屬からの掠奪財寶を基礎としたナイーツな古代蠻王國の性格を脱して Dagobert 時代から漸次に都市又は現地のヴィラに根をおろしていく Episcopus や seigneur の Recommendatio, vassallitas, [Lendesamio] Immunitas 等々のフランク固有の社會經濟制度を脊髓として形成される major のまたは Leud の組織を precaria, allodia, beneficium との統一において捉え、單に自然經濟や偽裝的貨幣經濟のみに歸着せしめることなく骨の髓まで検討し、南部イタリー(アプリア・カラブリア)やシシリーに足場をもちつづけたヴィザンツや ostrogoti や Visigothi や Mahomet その他の政治、外交政策、宗教、蠻族侵入等々の事象におし流されることなく正確にかかる世界史的客觀諸情勢との統一、史的必然の過程(可能性の全面的把握とその現實性への轉化の諸契機)においてとらえることは、その宗教軍事、外交政策の基盤をなす内面的關連 [Conventus Generallis] の政治形態の本質把握—人民の名のもとでの「階級性」とともに筆舌にいくしがたい困難をもちつのであり、名匠のアトリ

エから遙かに超克したものと成る。ヨーロッパ社會の誕生のベ
ルズベクティヴをあたえんとする著者の意圖は、ビレンヌ説の
批判の形をもつて、さらにドーブシュ説の一層の深化によつて
前進せしめられたが、もしこの方向ですすむならば、紹介者に
は、たとえ *Salvatorelli* 等のイタリーの史學者を介在せしめ
たとじく *Coulanges Julian*、[Guérard] *chavanne* 等々の
アルプス連山と *Ranke*、*Mommsen*、*Waiz*、[*Hirschfeld*] *D*
opsch 等々の諸連峰の間の深い溪谷をさすめることは、不可能
なることを認めざるを得ない。Wien のドーブシュは、勢のお
もむくままにカロリングに重點を置くこととなつたために、ま
ましく著者の指摘せる「*Nieberungen Lied*」や *Chanson de*
Guilaine d'orange 等の數々のなぞを秘めた「巨大な過渡期
をどびこえて」「正確にはフランス史學に身を托して」「ガロ・ロ
ーマまたはローマ世界に飛躍しているようにおもえる。このお
そるべき未墾地の開拓は、「權力は正義なり」—[*La Fontain-*
e の嘆き]との血潮のしたたるメロヴィンズのバルバーレンの
野蠻と「*Christianus Francorum*」の不屈と「フランスの *stui-*
dum」の激しい統一「對立物の相互浸透」調和への「*Chaos*」か
らの新しいヨーロッパ社會誕生の具體的生命の生産又は再生産
であるとしても新しい社會への價值轉換は、フランスではまさ
に人民 (*populus*) の手でなされたというフランス人達の聲を
わすれてはならない。

第二、第三におけるいわゆる民族移動期前のゲルマンの國制
または國家形態については、何よりもまづ *Tacitus* の原典へ
がはるかにザッハリツヒにすなおに本質に迫りうるのではある
まいか？ 藝術におけるように人間はふたゝび子供らしくなるこ
とはできぬのであるが。

ゲルマンに *Theokratie* を考へべきか否かは、*Mommsen*
の古典からすでにやかましいのであるが、紹介者は、著者の今
後の研究をまち、あいて書評の範圍を逸脱して理論の空轉(批
判的批判)をもつて本書をそこなうことを慚しない。

最後に、オストロゴルスキーの「ビザンツ史の初期」は實際
充實している。われわれは詳しくその勞作に接し得ぬのである
が、ロストウツエフの遺著その他によつてこの時代の政治、軍
事、外交の社會經濟的基礎が充分明らかにされることによつて
それがさらに具體化されるであろうが、紹介者には、オストロ
ゴルスキーの意圖を正確に把握するために、*ザイザンツ* の封建
化の一般的な敘述でなしにヘラクレイオス帝時代の今少しく
詳細な敘述が望みたかつた。幾多の不明な點があるとしても
Burkhardt の *Zeit des Constantin der Gross.* のように。

他の多くの研究成果については割愛せざるを得なかつたが、
少くとも題名に關する主要な論稿にふれることが出来たかを懸
念す。第四「九世紀に於けるフランスの商業」第五「歐羅巴世
界成立史覽」第六「ドーブシュの史覽と發展の問題」第七、「所
謂『モヌメント』篇纂初期の事情について」第八「都市及びギ
ルド」等の論想については残念乍ら取り上げるだけの紙幅を紹
介者にはすでに與えられていない。この點著者に對して深くお
わびしなければならぬ。

の沈潜をもつて始められ、通説並びにマルチン・リンツェル等
の諸説をも考慮しつつ検討されるのであるが、共和制、王制がそ
の政體の相違にもかかわらず、ゲルマン自身の側から云つてそ
れ自體として重要な意義をもたぬとしても「たゞ *Tacitus* の
筆を通して取上げられる場合、リンツェルの如き理解が起つて
くるのである。

著者はゲルマンの *Vorstatische* な性格をザッハリツヒに
検討されておるが、*paul Diacre* (*Warnfried*)、*Historia L-*
angobardorum 等もあるのであるから、*ランゴバルド* または *ア*
ルパネン、*ザクセン*、*サリ* 諸族等についてもこの問題が綿密に
検討されたならば、一見迂遠ではあるが、問題の深化に寄與す
るところが大であつたのではあるまいか。「一部著者によつて
Ostrogoth 等について果されてはいるが。」

Thudans が *ザイザンツ* 等にみられる *Basileis* 「ギリシヤ
語の *Basileis*」等とは著しく異るとは、*ヘンリッヒ* 時代また
は *ヘルシヤ* 戦役後の *ヘルシヤ* 王のそれと同じように *Wulfila*
等によつて用いられたとしても東方 (ギリシヤ・ヘルシヤ・ア
レクサンドリア) の文化の深さと廣さをよむことができて問
題にどれだけ寄與するかは、紹介者には不明である。

さらに *stips regia* に統一される「王」または「首長」の
問題についてもわれわれは、さらに明確な形態をとつた *S. P*
Q. R. y. Caesar (*emperium*)、*dominatus* (*tyrannis*) の政
體でなしにまづ *vorstaatlich*、*vorgesetzlich* な *バルバー*
レン の *ナイーツ* な *stips regia* をそれ自體としてとりえる方

われわれは今や隱遁者又は傍觀者的に歴史の追憶と冥想にの
みふけることは許されぬ。勿論われわれは、「歴史家の最も
共通な *errors*」の一つは、他の時代の人々に今日の *Ideas* を歸
屬せしめることである」という *クラウジウ* 以來くりかえされて
きた警告を片時も忘れてはならない。だが、それは、一人歴史科
學のみがこつとらう品であつてよいという理由にはならない。

ヨーロッパの統一と誕生が一人 *Chalermagne* のみによつて
形成されたのではなく、聖俗、公私の生活規範に基くヨーロッ
パ社會の廣汎な *populus* によつて、亡びゆく體制を必死に挽
回せんとする社會と興隆する社會との激しい *struggle* の中か
ら、生きた生命の躍動の中からみ出された中世社會は、數々
の神秘を秘め乍ら *ザイザンツ* 的な統一(又は調和)と分裂の不
斷の脈動をいつけてきた。 *Homo ad medium aevum* は「*A.*
Smith から歪められてしまつた *Homo Economicus* と眞反對
に」まさにかゝる史的必然と具體的な史的條件の中で、その可
能性の全連鎖の中で、ザッハリツヒな生命體として歴史そのも
のを形成してきたものであり、社會學的類型化の觀念の所産で
もなく單なる脂肪や血肉の塊り (*モーパーッサン*) でもなく、眞
に *ディアレクティツ* シェな人類の自然史的運動をみずから形
成し、組織してきた。

「*シモニー* の *スキヤンダル* 等が、あるとしても」*Christiani-*
s Francorum の豪僧達もまたその例外ではなかつた。

増田四郎氏著『ヨーロッパ社會の誕生』は、多くの困難と
haos にもかゝらずヨーロッパ中世社會への一つの礎石と幾
多の手がかりを與えてゐる。〔西洋經濟新書、啓示社、三三〇圓〕